

マックス・ヴェーバー「産業労働の精神物理学に寄せて Zur Psychophysik der industriellen Arbeit」を読む

高岡 佑介

1908年から1909年にかけて、マックス・ヴェーバーは『社会科学・社会政策論叢 *Archiv für Sozialwissenschaft und Sozialpolitik*』誌上に、「産業労働の精神物理学に寄せて」と題された長大な論考を発表した。この論文は、同時代に行われていた労働効率に関する研究、とりわけ疲労 *Ermüdung* の影響を主題とした実験心理学者らの取り組みに対する論評として書かれている。同論文の読解を通じて本発表では、産業化の進展に伴い前景化した疲労現象に対して、ヴェーバーがどのように取り組んだかということをはっきりと明らかにする。

論文の冒頭でヴェーバーは、機械や賃金制の導入、分業といった新たな労働環境がもたらす問題について知ろうとするなら、生理学や実験心理学などの人間研究の知見を参照しなければならないと述べる。というのも、ヴェーバーによれば産業化に伴う労働環境の変容は、労働者の「精神物理的装置に課せられる諸要求の変化」を意味するからだ。ここから考察の焦点はまず、力を発揮する当の「装置」、つまり人間の身体に置かれることになる。

ところでこうした、いわば身体的活動条件の変容とは、19世紀後半の都市化に伴う一連の変化を指す。都市化とは、人口に対する食糧等の不足に由来する深刻な貧困状態（「大衆窮乏化」）を打開するものとして生じた人口移動と産業化の帰結であり、高い人口密度と、機械のリズムに先導された過密な労働スケジュールをその主要な特徴とする。こうした環境下で当時の労働者はハードワークからくる睡眠不足や頭痛を訴えた。この頃には「疲労」は、十分に身体を動かしたことの印として考えられていた18世紀後半とは異なり、危険な事態を招来する「力の消耗」として否定的な含意を帯びようになっていた。

この問題に対する解決の糸口として、ヴェーバーが参照したのがエミール・クレペリンの疲労研究だった。クレペリンらの生理学・心理学的研究では、疲労は作業能率の減退・回復を通じて観察された。そうして、労働場面における作業の練習や休憩がいかに疲労の影響を緩和するかということが検討されたのだった。

しかし、ヴェーバーはクレペリンによる疲労メカニズムの分析は有効であるとしながらも、全体としてクレペリンの研究の利用可能性については留保を示す。その理由は、実験室において大多数の事例を均し抽象化することで導き出された知見は、実際の労働現場では十分に成り立たないというものだった。そうしてヴェーバーは「数値批判的な *zahlenkritisch*」方法として、文脈に密着した個別調査の必要性を訴える。

さしあたりここで強調しておきたいのは、ヴェーバーは数量化に基づく研究成果を全否定したわけではないということだ。そして今後考察の対象とすべきは、彼が数値批判的なあり方として提起した個別調査によって明らかになるものが、平均にみられる数量化の考え方が前提とする「個」といかなる点で異なるのかということである。